

編集後記

辻幸夫、武藤浩史、太田昭子、ジェームズ・レイサイドの四先生退職記念号が無事に刊行の運びとなった。ご協力いただいた方々にまずは御礼申し上げたい。

同時に四人もの先生が退職される事態は、法学部英語部会初のことであろう。四先生と三十年以上にわたってご一緒させていただいてきた筆者としては、これまでの日常が一変してしまう寂しさを禁じえない。思えば、四先生は筆者にとってみなゆかりのある方々である。

筆者が法学部の助手の採用試験に臨んだ時、監督にいらしたのが辻先生であった。私事になるが、筆者の妻は大学院時代に言語人類学を専攻し、辻先生の専攻領域である認知言語学との接点が多い。認知言語学の日本での発展を目指して辻先生を中心に組織された新たな学会には、妻も参加し、多くの知的刺激を受けた。

武藤先生は、大学院の先輩だが、世間でいう同期入社である。武藤先生が本号に寄稿されているように、1990年代前半は若手が多く、カリキュラムの移行期にもあたり、若手で集まってワイワイやることがとても多かった。退職される四先生に加えて、横山千晶、小屋逸樹の両先生を交えたメンバーで授業の後に過ごした時間が筆者も懐かしい。

1993年のカリキュラム改革で地域文化論を立ち上げた時、イギリスのコースの基礎科目を快く引き受けて下さったのが太田先生だった。英米文学専攻出身の筆者が、アメリカ研究入門の授業の準備に悪戦苦闘する中、東大の比較文化ご出身の太田先生に安心してイ

ギリス研究の入門科目をお任せできたことは、本当に心強かった。

英語部会初のネイティブ専任者となられたレイサイド先生とは、日吉の研究室が二人相部屋だった時代に同室で、入試問題の作成では何度も助けていただいた。レイサイド先生で特筆すべきは、日本語の急激な上達である。先生が学部の仕事を日本人教員同様に分担され、立派に務め上げられる様子を拝見するのは、部会としても誇らしかった。

四先生には、多くを学ばせていただいたのみならず、かわいがっていただいた。筆者が幸福な大学教員生活をスタートできたのも、これらの先生方のおかげである。深く御礼申し上げたい。四先生の末永いご健康とご多幸を祈念するとともに、これからも後輩たちを温かく見守ってくださるようお願い申し上げる次第である。

(編集委員 鈴木透)